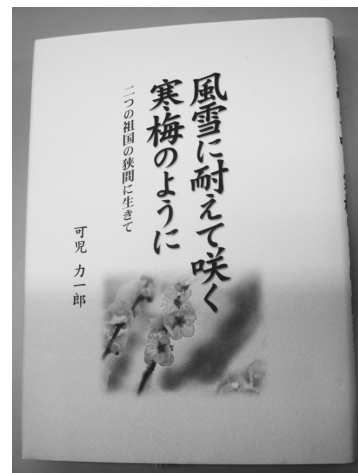
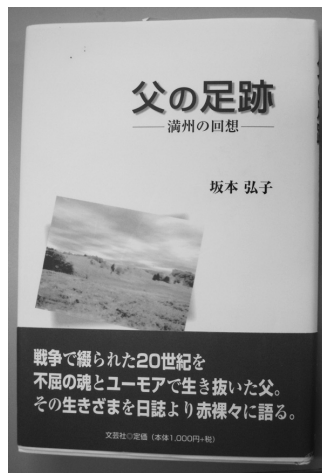


満蒙開拓移民について思う

坂本弘子著『父の足跡——満州の回想』と可児力一郎著『風雪に耐えて咲く寒梅のように——二つの祖の狭間に生きて』を読んで

藤井 正義

最近読んだ旧満州に関する二冊の本を紹介する。一つは坂本弘子著、「父の足跡—満州の回想」であり、もう一つは、可児力一郎著、「風雪に耐えて咲く寒梅のように——二つの祖国の狭間に生きて」である。



激動の時代を生き抜いた父の日記

「父の足跡—」の方は、東北の農家に生まれ、生活に窮して炭鉱夫や季節労働者となり、後に兵役で渡満、九十五歳の天寿をまっとうするまで、激動の時代を生き抜いた父親の、波乱に満ちた生涯の日記である。娘の著となっているが、ほぼ原文のままであるという。

父親は1931年の柳条湖事件の頃、兵役で旧満州に赴任、古参の下士官にまで出世して帰国、十一年の兵役を終えると、再び渡満して旧満鉄に入社、北満に転勤となり^{ハルビン}哈尔滨を基地として関東軍の軍需品の運搬に当たった。

敗戦を佳木斯でむかえ、軍や難民の輸送のため船舶の手当てにあっていたが、ソ連軍の追撃を受けて途中で打ち切り、食料を積み込み、方正港で負傷者と婦女子を収容し、家族のいる^{ハルビン}哈尔滨に引き揚げた。日本人狩りで拉致されたが、途中で脱出、いろいろな仕事をして生計をたて一年後の昭和21年9月、^{ハルビン}哈尔滨駅より奉天・^{コウカウ}葫蘆島經由で帰国した。確かに、小学校しか出ていない父親が、激動の時代を生き抜いた逞しさは文面の随所に読み取ることができて、その生き様には頭がさがる。

開拓移民についての克明な証言

「風雪に耐えて咲く寒梅のように—」は、実体験を通じて、満洲開拓民とは何だったか、実に克明に、かつリアルに描いている。いわく、開拓移民の時代背景、著者の生まれ故郷である^{よみかきむら}読書村（現在の木曾郡南木曾町）で分村計画が実施に移された様子、入植地に到着

直後味わった失望感（こんな筈ではなかったと！）、現地での過酷な日常生活、純朴な中国人達の親切、そうして敗戦。被害者である中国人との立場の逆転、彼らの温情と打算、著者のいう「血だらけの逃避行」辿り着いた避難所での地獄絵さながらの惨状、日本への帰国を待つときの焦燥感、帰国後の思わぬ肉親間の感情的ギャップ（時の隔たりと言葉の障壁）等々、内容は広範囲に及ぶ。本号に著者ご自身による寄稿もあるから一読されたい。

ここでは、可児著や坂本著その他の出版物から得た私の浅薄な知識に基づいて、満蒙開拓移民について私なりにおさらいをしてみたい。

ソ満国境の防衛と農村の口減らしのために

満蒙開拓移民は、対ソ戦略と抗日ゲリラ対策の軍事上の観点から、また、急増する内地の人口と昭和恐慌で打撃を受けた農村対策という経済的な観点から計画され、実施された。1932年、永豊鎮へ入植した弥栄（イヤサカ）村開拓団を最初とするが、このときは自分の土地をゲリラから守りたいという大地主と、日本の軍部の利害が一致した完全武装移民だった。続く第二次移民も完全な武装移民だった。1936年からは広田内閣のもとで本格的な移民として「分村移民」が導入された。その狙いは、やはり一つには、ソ満国境の防衛であり、更には人口増加による耕地面積の不足を解決するためだった。目標は、20年間に百万戸、五百万人の移民を行い、満州総人口の割を日本人で占めることであった。農業耕地の足りない県や、大正から昭和にかけての生糸暴落による養蚕収入の減少県では、農村の疲弊を解決するため、村民の一部を旧満州に移民させ、村の口減らしをする、いわゆる「分村移民」計画がたてられた。食べるに困る農民は、「満州に行けばふんだんに土地がある」との甘言にのせられ、これを拒む者には「米の配給を停止する」と村役場から半強制的に迫られたのである。

だまされた開拓移民たち

入植先での生活は緊張と不安に満ちていた。到着初日から、一家に一丁銃が与えられたところもある。日本人を遠巻きにしている中国人達の目は不穏な色を宿していた。現地の農民達は不当に安い価格で農地を満州拓殖公社に強制買収され、周辺の荒地に追放されたという事実を開拓民たちは知らされていなかった。炊事のための燃料にも事欠き、水がなくて遠く離れた井戸から、中国人に有料で汲んできてもらったりした。学校への往復は牛や豚の糞だらけの道だった。開拓民たちは入植してまもなく、「だまされた」と思ったという。それでも開拓民たちが現地の生活に慣れると、無学で義理堅い現地人は、生きるために開拓民と手を組んで生活する様になった。北満の厳しい自然に適した中国流農業を開拓民に教えたり、中国馬を提供してくれたりした。開拓民も現地人が一番欲しがる服地を提供したりして、結構よい協力関係が生まれた。1943年以降、戦況が悪化すると、それまで開拓民には免除されていた徴兵義務が課せられ、学校の先生までも召集され、授業はできなくなった。一家の主を召集された開拓団の家では現地人に田畑を貸す人も出てきた。

悲惨な逃避行

やがて魔の八月九日、ソ連軍の侵攻が始まると十八歳から四十五歳までの男子には全員口頭伝達による召集命令が発せられた。県公社から集団疎開命令が出て、閻家駅には読書、

泰阜、中川、七虎力などの4開拓団や、他の開拓団も集結してその数、数千人が引き揚げ列車を待った。しかし、せっかく準備された列車も、現地に留まるべきだとの反対派のために、空のままで発車した。開拓民は集落に戻ったが、そこは暴徒の襲撃の恐れがあるため、再び、集落を離れ、徒歩で危険をおかして「血だらけの逃避行」が始まったのである。開拓民は方正へ向かった。方正が落ち着き先の避難所となったのは、それ以上に陸路で哈尔滨へ行くのは匪賊の襲撃があり危険であること、また、開拓団本部跡の近くにある尖山に関東軍の要塞があるから、軍需品や軍用衣服、医薬品、食料などが蓄えられていると思ったからである。しかし、要塞は、現地人に荒らされた上、まもなく駐留したソ連軍に占拠された。ソ連軍は日本軍の遅れた武器弾薬には興味を示さず、それ以外の物資を十月までには運び去ってしまった。伊漢通港から松花江を哈尔滨へ向かう引き揚げ船が来るかも知れないという淡い期待もあった。鹿児島（沖縄）など先住の開拓団が逃げ去った跡の空き家も、流入した数千人の避難民を収容するのに充分とはいえないまでも、またとない施設であった。

現地中国人の温情と打算

逃避行中も、逃避先の避難所でも、中国人に身をゆだねる人が続出したが、貧困のどん底にあった現地の中国人が、何故われ先にと避難民を受け入れたのであろうか？彼らはそれほどまでに情の厚い人たちだったのだろうか？ 私だけでなく他の人々もかねてより抱いた疑問であったと思う。可児著を読んで一つの真実が明らかになった。当時、結納金が支払えないために未婚のままの中国人男性が多かったが、日本人女性を娶るなら結納金は要らない。日本人はよく働くから子供も労働力として役立つ。低年齢の女子は適齢期まで待てば結納金を取って他の家に嫁がすことができる。高年齢の男子はすぐ農作業に使える。これに目をつけた日本人狩りのブローカーが暗躍した。勿論、昨日まで主であった日本人開拓民の落ちぶれた姿を見て同情した中国人も多かった。

割を食った開拓民たち

終戦前後、旧満州には155万人の日本人がいたといわれる。満蒙開拓団の在籍者は27万人だったが、1945年の「根こそぎ動員」により、そのうち4万7千人が現地で召集された。ソ連の参戦時には開拓団人数は22万3千人に減り、その殆どが老人、婦人、子供だった。

引き揚げの順番は、軍司令部と軍人、軍属とその家族、官庁（旧満州国政府）の日系家族、満鉄や満州拓殖公社など国策・国営会社の職員とその家族、最後に一般市民だったが、哈尔滨など大都市にいた人の方が情報を得やすく、避難しやすかった。一番割りを食ったのは、遙かソ満国境近くに入植した開拓民だった。関東軍の主力は1943年には、南方戦線に、あるいは、本土防衛に「転進」し、1944年9月には大本営は防衛線を新京（現、長春）・図們を結ぶ京図線と新京・大連を結ぶ連京線以内に撤退し、事実上、旧満州の5分の4を放棄した。入植地は大部分が新たな防衛線の外側にあった。しかも、最終組の入植した1945年5月、終戦の3か月前であるといわれるから啞然とせざるをえない。

<ふじい・まさよし：社団法人日中科学技術文化センター参与、 本会事務局>